

## 学校運営協議会 会議実施報告書

- 1 会議名 令和元年度吉城高等学校学校運営協議会（第3回）
- 2 開催日時 令和2年2月7日（金）15:50～16:50
- 3 開催場所 飛騨市文化交流センター リハーサル室
- 4 参加者 委員 沖畑 康子 飛騨市教育長  
渡邊 正憲 株式会社飛騨ダイカスト代表取締役  
石原 典子 民生委員  
坂本 頼彦 吉城高校育友会長
- 学校側 日江井孝浩 校長  
大野 貴司 教頭  
日野 利明 事務長  
小原 誠 教務主任  
小澤 耕 進路指導主事  
寺門 隆治 理数科主任

### 5 会議の概要（協議事項）

#### （1）挨拶

#### （2）学校の取組等についての報告

- ・ 概要報告（校長）
- ・ 資料説明（教頭）

資料1 令和元年度 地域連携による活力ある高校づくり推進事業 実施報告

資料2 平成29年度から3か年の取組による成果と課題

資料3 地域との協働による高等学校教育改革推進事業

資料4 令和元年度 自己評価、学校関係者評価

<参考資料> ①学校経営計画（高等学校版マニフェスト）

②項目別数値実績と目標

③生徒、保護者アンケート

#### （3）協議・意見交換（課題・目標・ビジョンの共有、アクションの共有）

意見1 資料1の事業報告におけるYCKプロジェクト分野の「授業」と「総合」の違いは何か。

学校側 授業は、学校設定科目の「地域課題探究」や「英語会話」等で行ったもの、総合は「総合的な探究（学習）の時間」で行ったものである。

意見2 資料3の学校設定科目「地域課題探究」と「地域PBL（問題解決学習）」の違いは何か。課外活動は成績評価されるのか。

- 学校側 「地域課題探究」は1年次・2年次・3年次の選択科目として設定している。「地域PBL」は2年次の「総合的な探究の時間」1単位を「地域PBL」に代替し、普通科全員が3つのテーマ<①飛騨市（行政）が抱える課題、②身近な地域課題、③地域イベントの企画>から選択し、探究学習を行う。更に3年生総合コースでは「地域PBL発展」として、自分の将来の職業をテーマに探究学習を行う。なお、理数科では課題研究を実施するため、「地域PBL」は設定しないが、「地域課題探究」は理数科の生徒も選択が可能である。
- 意見3 資料4の教科指導における評価の視点「授業は改善されたか」での「改善」は、各教員の視点によるのか、それとも学校としてのテーマがあるのか。
- 学校側 今年度は、ICT機器の活用に関するアンケート、生徒による授業アンケート、校内での公開授業を指標として評価を行った。
- 意見4 YCKの取組に、昨年より積み上げが見られてよかった。途中、順調とはいえない状況も見られたが、結果よりプロセスが大切である。次年度新しい科目の開講や、習熟度別や少人数授業の実施など工夫されていて、労力のいることに学校全体で取り組まれていると感じる。
- 意見5 飛騨市学園構想においては「幸福な人生」「持続可能な未来の作り手」を目指し、どのような力を身に付けさせる必要があるかを地域とともに考えている。どんな力をつけるために、何をどのようにして積み上げていくかは、高校だけでは考えられないため、どの段階で何をすべきかを話し合ってきた。今年度中にはリーフレットを配布する予定であり、地域との協働体制を構築していきたい。
- 意見6 総合的な探究の時間等で行われている探究的な学びと教科の授業との乖離を感じる。PBLは教科学習の中でも重要であり、ICTについても使うことが目的ではない。与えられる知識を黙々とノートに書き留める場面を見ることが多いが、「主体的、対話的で深い学び」の目標が全教職員で共有されることが大切である。目指している授業が行われているかを検証するには、生徒アンケートの項目を検証し、授業の在り方を問うものに変える必要がある。
- 学校側 本校で開催したICT公開授業も含めた御意見だと思う。ICTの活用を目的としているところがあり、「探究」が見られなかった。ICTがメインとなり、主体性や対話的な取組が見られない授業ではいけないと強く感じている。
- 意見7 小中学校も同じ状況である。ともに研究できるとよい。
- 意見8 企業関係者としても地域愛が目覚めた感じであるが、優秀な人材が育てられても地元に戻ってこないという懸念があり、経営者懇談会でも問題としている。地元を離れても、力を付けて戻り、地域を活性化させてほしいと考えており、その部分も含めた取組をお願いしたい。中学校では、企業見学のアポ取りから礼状まで自分たちでやっており、YCKの活動につながられている。名刺も手書きの名刺で嬉しかった。
- 意見9 課題を見つけるためのデータをどこから入手しているのか疑問に感じた。社会の現状を示すデータを扱うには、外部の協力が必要なのではないかと感じた。YCK報告会での講師からの質問に対して、正解を答えることが目的ではなく、自分が研究したことをしっかり理解して伝えること大事である。「なにか、よいことを言わなければ」

ではなく、「自分はこう思っている」という熱いものが出せるようになればよいと思った。

意見 10 YCKの発表内容が、数段よくなってきていると感じた。教授の質問に生徒が自分の言葉で返せないことについては、話す力を付ける必要性を感じた。小学校、中学校の学校便りに「来年度はこのようなことを学校でします」「このような生徒を目指します」というような内容が秋以降増えた気がする。それが市民に広がり、親の気持ちも変わっていくことを願っている。それが地域における小学生、中学生の育て方に広がり、ゆくゆくは高校生の方にも広がっていくと期待している。なお、先ほど質問があった「いじめ対策」については、いじめ防止対策検討会議に委員として出席しており、組織的な対策がなされ、現状と対応状況が報告されていることを確認している。

## 6 会議のまとめ

今回の協議会は、本校のYCKプロジェクト報告会後に開催した。報告会への出席は任意とさせていただいたが、協議会委員すべての方に出席していただくことができた。

協議会では、YCKプロジェクトの質的向上や深まりを評価する意見が多く出された。本校が、コミュニティ・スクールとしての機能を強化し、「地域とともにある学校づくり」が実現されつつあると感じた。また、カリキュラムマネジメントに関する意見を多くいただく中で、地域課題探究の深化・発展、教科等横断的な取組による探究的な学びの充実が、今後の課題としてあげられた。